

# 真の多文化共生とは

EUの理念は「1つのヨーロッパ」。彼らは肌の色の違う非EU人たちさえも、果敢にEUに組み込もうとしているが。



作家・ドイツ在住  
川口マーン恵美

ドイツで暮らすようになって38年。光陰矢の如し。当時はメールなどなく、国際電話は学生には高嶺の花。だからせせと手紙を書いた。住所の最後には「W-Germany」。そう、まだドイツは東西に分かれていたのだ。

## ドイツで気付いた日本の良さ

ドイツに渡った最初の頃、私は憑かれたように模倣に走った。周りの人間が当たり前のようにやっていることが、自分にはできない。ドイツ人学生がドイツ語を話しているだけで、天才に思えた。そこで、「早く私もあになりたい！」が高じて、買い物も、挨拶も、さらにはお掃除の仕方まで、無意識のうちにドイツ式を真似た。そういう無我夢中の間は、批判精神も働かない。まるで赤ん坊の成長過程と同じだ。

しかし、1年もたつと赤ん坊時代は終わり、元の自分が戻ってくる。ドイツ語をしゃべっている人たちが、必ずしも皆、頭が良いわけではないという当然のことにも気付いた。こうなると、批判の能力もあつという間に回復する。それどころか、あたかも強い力で引っ張られていた枝が、突然、自由になったかのように、時に反動で思い切り反対側に振れる。だから、生活に不自由がなくなった一方で、ドイツ式に対する文句も増えた。

これが過ぎ、「ドイツの自分」のポジションが固まるまでには、それからさらに数年を要したと思う。その頃には語彙も増え、知り合いも

増え、自衛のために必要とあらば、口げんかもできるようになった。ようやくドイツと日本を公平に比較できるようになり、日本の良さに気付いた。おそらく、海外で暮らす他の多くの日本人と同じように。

## 移民率が50%を超える地域も

2019年、ドイツの移民と移民の子女など(以後、まとめて移民)の割合は、全人口の26%に上った。うち、ドイツ国籍をもっている人といない人の内訳は、ほぼ半分ずつ。ちなみに私は統計上では、ドイツ国籍をもっていない移民に当たる。

移民の出身国をみるとトルコ系が一番多く、300万人近い。人口8200万弱のドイツにおいてはかなりのインパクトだ。2位はロシア系で、ポーランド、イタリアと続く。ロシアからはソ連の崩壊後、元々ドイツ系だった人たちが怒濤のごとく戻ってきた。イタリア人の多くは1950年代の労働移民だった人が定住したケース。ポーランド人はEUに加盟してからの労働移民だ。移民は都会に集中するので、フランクフルトでは市の人口の43%が移民だし、所によっては移民率が50%を超えている地域もある。

移民の中には、長く住んでいてもドイツ語がおぼつかない人も多く、そういう人たちが集中する地域の学校では、ドイツ語での授業が困難となり、残念なことに犯罪率も上がる。これは、20年以上も前から指摘されていながら、いま